

TIC NEWS

vol. **142**
2022.1

(公財) とやま国際センター

〒930-0856 富山市牛島新町5-5

インテックビル4F (タワー111)

TEL (076) 444-2500

FAX (076) 444-2600

E-mail : tic@tic-toyama.or.jp

URL : <http://www.tic-toyama.or.jp>



第26回とやま国際草の根交流賞表彰式

去る11月11日、富山県民会館において、国際交流・協力活動を草の根レベルで実践している団体、個人を表彰する“とやま国際草の根交流賞”の表彰式を行いました。

継承語教育を考える～ベトナム語母語教室の活動から～

日 時：令和3年10月24日(日) 13:00～16:00

場 所：環日本海交流会館 大会議室

基調報告：「富山県の外国にルーツを持つ子どもとその言葉の問題」 田上 栄子 氏（トヤマ・ヤポニカ）

事例報告、ワークショップ：ズオン・ゴック・ディエップ氏（ベトナム夢KOBEM語教室代表）

県内の学校に通う外国人児童・生徒、また、外国にルーツを持つ子どもの数は年々増えています。今回は長年にわたって神戸市でベトナム語保持活動をされているズオン・ゴック・ディエップ先生を迎え、継承語教育の意義について考えるセミナーを行いました。



基調報告として、日本語教育機関トヤマ・ヤポニカの田上先生より「子どもの将来を考え、子どもの言葉の発達について親が理解することが重要」、「学校の勉強（学習言語）を、日本語と母語の二つを用いて行うことが大事である」という話がありました。

次に、ディエップ先生からベトナム夢KOBEM語教室の活動紹介の後、ベトナム人親子が実際参加して母語保持ワークショップが行われました。ディエップ先生は、会話力は家庭でもある程度維持することができるので、母語教室ではやはり読み書きの学習を行っていくこと、そして子どもが嫌にならないように楽しみながら勉強を続けることが大事であると強調されました。

参加したベトナム人親子は、母語保持という共通の目的を分かち合い、母語教材のリスト等、貴重な情報を共有しました。参加者からは「ベトナム語を覚えることで親の国をよりよく理解できる。言語だけではなく、文化についても教えていくことが大事」、「日本語支援を行っているが、日本語教室の中で母国の文化について調べて発表するような活動を取り入れたい」といった感想が聞かれました。

日本語支援ボランティアスキルアップ研修会 ～外国にルーツをもつ子どもたちと発達障がい～

日 時：令和3年12月4日(土) 13:30～15:00

講 師：高橋 脩 氏（豊田市福祉事業団理事長／児童精神科医）



講師の高橋氏

今年度のスキルアップ研修会は、豊田市福祉事業団理事長であり、児童精神科医でもある高橋脩氏を講師としてお迎えし、Zoomオンラインセミナーを開催しました。

在留外国人が増加するなか、外国にルーツをもつ発達障がいの子どものたちも増えています。富山県においても小・中・高及び特別支援学校に在籍する外国人児童生徒は年々増えて800人以上と、北陸3県の中でも最も多くなっており、発達障がいの子どものも増えているものと思われます。

2021年には「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告」の中に“障害のある外国人児童生徒への対応”が課題として初めて明記され、文科省が全市区町村の特別支援学級に在籍する外国籍等の子どもの実態調査に着手しました。これによって発達障がいをもつ外国籍の子どもの実態が明らかになってくることが見込まれます。

外国にルーツをもつ子どもは二言語を日常生活で用いることからモノリンガルの子どものとは異なる言語発達の様相を示します。また、文化の違い、発達障がいへの理解の有無等により発達障がいの発見・診断が遅れてしまうことがあります。

加えて、特別支援教育に関わる制度がよく理解されていないまま、外国籍の子どもの特別支援学級に入級しているケースも見られます。特別支援教育をどのように受けるかは、親や子どもの考えが最大限尊重された後に、教育委員会が決定するものとされています。納得できるまで情報を得て、学級を見学し、実態を知ってから判断することが重要になってきます。

「個人レベル、行政レベルの両方からの働きかけがなければ外国人が日本人と平等のサービスを受けるには至らない。課題は多いが10年経てば世の中は変わります。一緒に頑張りましょう。」という高橋氏の言葉に勇気づけられた実り多い研修会となりました。

発達障がいに関する外国人保護者向けパンフレット」(2019年;16か国語版)が“発達障害情報・支援センター”のサイトからダウンロードできますので是非ご参考としてください。

国際交流ひろば

－富山県国際交流員による各国お料理教室－

日時：令和3年 7月17日(土) 10:00～13:00「韓国料理」
令和3年10月23日(土) 10:00～13:00「ブラジル料理」
令和3年12月 4日(土) 14:00～17:00「インド料理」
場所：富山県民共生センター「サンフォルテ」調理実習室



富山県国際交流員が各々の出身国の文化を楽しく紹介する「国際交流ひろば」。今年度も国際交流員が講師となって各国の料理教室を開催し、いずれの回も定員いっぱいのお申し込みをいただきました。

1回目の「韓国料理」では、チヂミとビビムグッズを作りました。ビビムは混ぜる、グッズは素麺を意味しますが、素麺に混ぜるソースには本場韓国産のコチュジャンと唐辛子粉を使用したため、本格的な辛さとなり、皆さんヒーヒー言いながらも真っ赤になった麺を楽しんでいました。

2回目の「ブラジル料理」では、タピオカとフェイジョンスープ（豆のスープ）を作りました。日本では、タピオカといえばドリンクに入った粒粒をイメージしますが、ブラジルではタピオカ粉で作る白いクレーブのことです。今回のメニューはどちらもブラジルの国民食なので、ブラジル料理を知る良いきっかけとなったようです。

3回目の「インド料理」では、サモサとチャイを作りました。サモサの皮は生地から手作りする本格的なレシピでしたが、皆さん上手に包んで美味しく仕上げることができました。また、サモサの付け合わせとして作ったミントチャツネが大変好評で、家でも作ってみたいという声が多く聞かれました。

4回目は、3月に「ロシア料理」を予定しております。詳細が決まりましたら、TICホームページにてご案内いたします。皆様のご参加をお待ちしております！

とやま国際塾

日時：令和3年12月12日(日) 9:30～16:00
講師：八田 裕司 氏（JICA北陸国内協力員）・松山 優子 氏（JICA富山デスク）
スロボダン パブコヴ 氏（元富山県スポーツ国際交流員）

県内高校生を対象とした“とやま国際塾”は、県内21名の高校生と、4か国4名の留学生、5か国5名の国際交流員（CIR）が参加し、お互いに交流を深めました。

開講式の後、自己紹介やCIRが企画したゲームを楽しみながら、お互いの交流を深めました。

午後からは、JICA国際協力推進員の松山優子さんとJICA北陸国内協力員の八田裕司さんによる国際協力についての講義やワークショップを行いました。

松山さんのワークショップでは、グループに分かれ「町の環境問題」について考え、発表しました。八田さんの講義では、ホンジュラスでの環境教育隊員としての活動体験を聞き、ゴミが自然に還るまでの過程について考えました。国による環境状況の違いやワークショップによる気づきから、自分たちの生活を振り返るきっかけとなりました。

続いて、セルビア出身の元富山県スポーツ国際交流員スロボダン パブコヴさんを講師に迎え、ご講演いただきました。セルビアの国の紹介や食生活についてのお話は、異文化の知識を深め世界に目を向ける大変貴重な機会となりました。

また、異文化で生活するうえで苦勞した日本語学習の経験を元に、英語を習得するには間違いを恐れないことや完璧に話そうと思わないことが大事、と高校生に話っておられました。

最後はスロボダンさんを囲んで記念撮影をし、短くも有意義なイベントになりました。



令和3年度 多文化共生フォーラム

11月28日(日)、富山県との共催により開催しました。

漫画家・タレント

星野ルネ(ほしの・るね)さん

1984年カメルーン生まれ。4歳になる直前で母の結婚に伴い来日し、以降、兵庫県姫路市で育つ。現在は、タレント活動の傍ら、幼い頃からの武器であった画力を生かし、SNSを使った表現活動を続けている。著書に『まんが アフリカ少年が日本で育った結果』、『まんが アフリカ少年が日本で育った結果(ファミリー編)』、『まんが アフリカ少年が見つけた世界のことわざ大集合』。



第1部 アフリカ少年が日本で漫画を描いた結果

見た目はアフリカ出身、中身は関西人というルネさんが、日本での暮らしの中で経験する様々な出来事をコミカルに描いた漫画『アフリカ少年が日本で育った結果』。自身のルーツや、母親の出身地であるカメルーンについてなど、星野さんにとっての多文化共生は何かを、とやま国際センター国際交流推進専門員 中村が伺いました。

中 村: 星野さんは日本で色々体験してこられたことを漫画にしていっていらっしゃいますが、アフリカ出身あるある、というか、そういったエピソードがあれば教えてください。

星 野: これは漫画にもしたんですけど、運動会の話です。やっぱり先入観でアフリカ系の人って身体能力が高いっていうのがイメージとしてありますよね。

僕もね、幼稚園の頃とか、小学校入ったばかりの頃は自分でもそう思い込んでました。実際幼稚園から小学校の2年生ぐらいまでずっとかけっこが一番だったんです。けど、3年生か4年生の時、はじめて3着になっちゃったんですよ。アフリカ人が日本人に負けた！って、みんな生徒も保護者もびっくりして、ちょっとざわざわしちゃって(笑)今日は調子悪かったのかな～なんて言われたり。

けど、その時ね、いやいや俺は負けただけやねんって思ったんと同時に、そうか、アフリカ人全員が足速いわけちゃうんやって、僕もそのことに初めて気がついたんですよ。まあ、よく考えたら当たり前の話なんですけどね。日本人の中にもね、運動神経がいい奴もいれば、運動が苦手な奴もいる。当然アフリカの人だってそうなんですよ。

これ、結構、僕は今となっては当たり前のこととしてわかっているんですけど、こういった経験を通して初めて、なるほどって発見するということもあるんじゃないかなっていう、そういう漫画です。

中 村: 確かに、逆に海外の人は、日本人はみんな空手とか柔道ができると思っているっていうのがありますね。

星 野: そうそう。日本人あるあるですよ。家電とかなんでも直せると言われたり(笑)

~~~~~中 略~~~~~

**中 村:** さて、続いて、「スイミー」のお話。このお話は結構皆さんも知っているんじゃないかと思いますが、どんなエピソードですか？

**星 野:** これは小学校の国語の時間で読んだお話なんですけどね。どんな話かという、赤い魚の群れの中に、1匹だけ黒いスイミーっていう子がいて、自分だけ周りとは違うからちょっと溶け込めずにいたと。それを授業中に読んだ僕は、すごい

感情移入できたんですよ。俺はスイミーと一緒にや！って。で、このお話がこの後どうなるのかということ、この赤い魚たちが唯一恐れている大きい天敵の魚に勝つためのアイデアを、スイミーが思いついたわけです。みんなで集まって大きな魚の形を作って、自分は体が黒いから目になれるって。そこでみんなで協力しておぼらうと。

みんなと違うスイミーやっただけど、ちゃんとこう役に立てるっていうお話で、自分の中で読んだあとすごい元気が出たんですよ。最後に、スイミーありがとうって思ったっていう素朴な思い出です。

**中 村:** やっぱり学校で1人だけ肌の色が違うと、いろいろ感じることはありましたか？

**星 野:** 僕、日本に来たのが、幼稚園ぐらいなので、幼馴染が結構いて完全に疎外感があつたわけではないんです。けど、ふとした時にやっぱり、うん、感じるんですよ。俺だけちょっとみんなと違うなって。いろんなところでちょくちょく感じることはありました。そういった、自分のちょっと寂しい心にちょうどこのスイミーの話が入り込んできたんですよ。

多分ね、スイミーもまわりの魚たちと仲良く話とかはしてたと思うんですよ。してるけど、ふとした時にちょっとやっぱりみんなとは違うってことを思い出してしまうというか。でも最後には色が違うもん同士が協力して大きな魚をやっつけるっていう、そんな感じがすごく良いですよ。

**中 村:** 多文化共生にもつながるお話ですよ。(中略) 多様性についてはどうですか？

**星 野:** 世界にはいろんな考え方やいろんな価値があるとわかったとして、そこから選ぶのってすごく難しいなと思うんです。そこで悩んだこともあります。

“多様性の海”としたこの漫画ですけど、「多様性っていいよね」という言葉が時代とともに出てきて、例えばね、外国にルーツがあるお子さんを持つ親が子どもに、“多様性があるからあなたは素晴らしいんだよ”っていうメッセージを投げかけることって結構よくあると思うんです。でもね、子どもはね、僕の子どもの時もそうだったんですけど、多様性というものをどう使っていってもわからないんですよ。生かし方もわからな

いんで、子どもの時にはむしろその多様性に翻弄されることの方がすごく多かった。だから「子どもが泳ぐには多様性の海は深すぎる」という大人へのメッセージでもあるんです。

けどね、この漫画にはちゃんと続きもあって、いつか多様性の海を乗りこなせるようになるんだという、これは今の子どもたちに対するメッセージです。今は確かに大変かもしれないけど、今は溺れそうかもしれないけど、いつかその海で泳げるようになるんだよって。そんな希望を込めた漫画です。

~~~~~中略~~~~~

中村：最後に、この漫画を描かれた星野さんからメッセージをお願いします。

星野：僕、多文化共生とか多様性とかって結局何が大事なのかって考えたときに、やっぱり想像力だと思ってるんですよ。要するに、自分とは違う人を思いやるという想像力というか、相手を想像してみたいんです。

けど、例えばカメルーンの人がこんな時やったらどう思うんやろうということはなかなか想像って難しいと思うんですよ。ただ、僕は母親ともう長いこと一緒にいますから、うちの母が喜ぶこととか、なんか嫌がってたなっていうことはやっぱり記憶に残ってるんですよ。同じ時間を一緒に過ごしてたからね。

だから僕はこの「アフリカ少年が日本で育った結果」っていう漫画で、読者が僕自身の家族の人生を追体験することによって、こんな暮らしがあるんやとか、こんなことに悩んでるんや、こんな面白いことがあるんやということ、読みながら、友達になって欲しいんです。それで、これ読んだ方は何となくこうアフリカ少年という人のことを想像できるようになるんじゃないかなと。

そして、僕だけのことじゃなくて世界中の人に対しても想像力を持つことができるんじゃないかと思うんです。

人がそれぞれどっかで生まれて、どっかで育った結果がそれぞれあるんだよって、そんな想像を膨らまして欲しいなと思って、僕はこれを書いたんです。

~~~~~中略~~~~~

今、日本の社会でね、どんどん多文化共生とか多様性というものが話題になってきて、昔と比べて日本に住む人の顔ぶれもどんどん変わってきてる。でもね、日本も大昔はきっとそうだったんですよ。今の日本になる前は、もっとバラバラの小さな地域が存在してて、それがだんだん合わさって大きな日本になったんですよ。昔、日本は多文化共生とか多様性っていうのを、経験してるはずなんです。

僕、日本の魅力って、外国のものや文化を上手にとらえて柔軟に日本社会の中に受け入れて、そこからさらに発展させて物を作ってきたことと思うんです。だから、多様性とか多文化共生って実は日本人が苦手なことじゃなくて、得意なことなんじゃないかと思うんですよ。

日本人はそうやっていろんなものを組み合わせ、最高のものを作り出すということが得意な、歴史的な背景を持つてる国なので、僕がまだ若かった20年以上前に比べて、もうすでにじわじわ多様性と多文化理解って進んでいってる気がします。

ぜひ今日聞いた話で、何か面白かったこととか参考になったことがあったら、誰か1人でも多くの人に教えてあげてほしい。そしたらもっと(多文化共生や多様性の)その一歩、スピードが速くなるんじゃないかと思います。

## 第2部 パネルディスカッション ひろがれ！多文化共生の輪

第2部では、県内で様々な活動をされている、NGOダイバーシティとやま代表の宮田妙子さん、高岡ポルトガル語講師会代表でご自身もブラジル出身日系3世の赤沢省三さん、コミュニティハウスひとのま代表の宮田隼さんの3名をパネリストに迎え、多文化共生が導く未来の社会について伺いました。



宮田 妙子さん

私は日本語教師としても、もう何年も活動してきて、やはり最初は留学生に対して、どうしても日本のやり方を押し付けたり、無意識に合わせるように仕向けていたことがあったんです。でもやっぱりそれではお互い辛くて…。ある時から彼らの考え方や生き方にむしろ学ぶことが多いと気が付いたんです。彼らの中にはそのまま富山に住み続けている人も多く、皆同じように言うのは「富山が好きだ」ということです。私も昔そうでしたが、異なるものに出会ったときって、最初は違うって排除したり、或いはもっと同じようにしてって、強制させてしまったりしがちです。でも、それじゃ新しいものやイノベーションって生まれてこないんですよ。いろんな違いがある人が同じ地域の中で、自分の力を出して活躍できるのが、多文化共生社会だと思います。



赤沢 省三さん

私も家族も富山が大好きで、これからずっと富山で生活して、活躍したいと思っています。なので、外国人へのサポートをしています。ちょっと矛盾に思えるかもしれませんが、私の思いは、外国人の生活がより良くなれば、日本人の生活にも良い影響があるということです。さらに、いずれは巡り巡って私の生活もよくなる。そういう良い循環を作っていきたいと思っています。だからこそ特に外国人の子どもたちへの教育は大切だと思っています。彼らは地域の宝です。いずれは日本人を助ける存在になるかもしれません。良い多文化共生の輪を上げていきたいです。



宮田 隼さん

僕は「ひとのま」の活動をもう10年やってるんですけど、中にはいわゆる刑務所から出てきた人とか、ホームレスの人とか、子どもからしてみると一見「うーん」と思う人たちが結構いるんです。けれども、今の雰囲気はどうかっていうと、全然誰も驚かないんです。ずっと前から驚かなかったかというそうではなくて、当初は、やっぱり子どもたちの中にも怖がってた子もいるはいたんです。

けれども1回受け入れてみて一緒に過ごすうちに、だんだんそれが当たり前になっていくんですよ。ただ、やっぱり途中から入ってくる子どもたちもいるわけで、けど、その子たちがみんな訝しげに入ってくるかっていうそうではなくて、すでに当たり前の空気が出来上がっているから、新しい人が入ってきたとしてもすんなりこう入っていけるんです。

その空気感っていうのがこの社会の中に蔓延していったら、それこそ多文化共生につながるんじゃないかなと思います。





# JICAのHP・SNS活用についてご紹介!!

JICA北陸では、多くの皆様に幅広く認知いただくために、HPやSNSを活用しております。

## ◆JICA北陸のホームページをご存じですか？



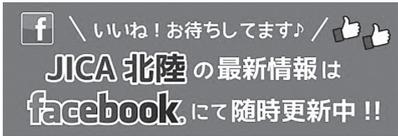
<https://www.jica.go.jp/hokuriku/index.html>

『イベント情報』『トピック』だけでなく、JICA関係者へ取材・インタビューしてまとめた『人』明日へのストーリー』は、おすすめですよ！



## ◆JICA北陸のフェイスブックは、ほぼ毎日更新中!!

[https://www.facebook.com/jicahokuriku/?ref=page\\_internal](https://www.facebook.com/jicahokuriku/?ref=page_internal)



イベント情報だけでなく、事業活動報告や新しいスタッフの紹介、北陸3県の様々な活動を紹介しています！

## ◆JICAのYou Tubeチャンネルも、是非のぞいてみてください!



・「JICAchannel1」=日本語バージョン

<https://www.youtube.com/user/JICAchannel1/featured>



(ちなみに「JICAchannel2」は、英語バージョン)  
JICA海外協力隊のムービーやJICA事業についてわかりやすく紹介している動画など多数あり!

## JICA海外協力隊からの現地レポート — 番外編 コロナ禍で帰国、今の思い —

世界中で活動しているJICA海外協力隊は、2020年3~4月に新型コロナウイルスの影響により一時帰国を余儀なくされました。帰国後、複雑な思いを抱えながらも新たな道に進む富山県の協力隊員の今の思いを聞いてみました。

### 2018年度 4次隊 松井 克樹(まつい よしき)さん(派遣国:ザンビア共和国、職種:家政・生活改善)

ザンビア共和国ルサカ州カフエ郡農業事務所に所属し、現地住民を対象とした栄養改善指導を行っていました。農業省職員と共に現地住民の生活習慣を調査し、栄養バランスの取れた食事や、新規レシピの提案を行うことで栄養改善に繋げる働きかけをしていくことが主な活動でした。その他にも、現地の農家さんに対して稲作の普及活動を行ったり、新規作物の栽培提案をする等、幅広い活動を行ってきました。



ドライフードネット 製作時の様子



栄養改善ワークショップで作ったマンゴージュム

しかしながら任期一年目も終盤に差し掛かった頃、新型コロナウイルスの蔓延により帰国を余儀なくされてしまいました。活動半ばでの帰国となり、胸を張って報告できるような成果を現地住民や農業省職員と共にあげることが出来なかったことが心残りとなりました。

現在は地元富山で農業に従事しています。ザンビアでの活動も影響し、帰国後に農業に従事したいと考えようになっていたからです。今後は農業を通じて、ザンビアと日本との交流をより一層深めていきたいと考えています。



生育途中の稲作の様子

# 共に生きる TOYAMA

## 「赤毛キウイランド」 許 斌 さん (中国・四川省出身)

～今回、氷見市赤毛の山間地でキウイフルーツの大規模栽培に取り組んでいる許斌さんにお話を伺いました～

### 来日のきっかけ

中国で学生時代から日本語の勉強を独学で進めていました。今から20年ほど前の話です。妻と出会ったのはそんな時でした。ちょうど中国に短期留学していた彼女と意気投合し、3年間の遠距離恋愛を経て、結婚のため妻の暮らす日本、そして富山県に来たことがきっかけです。

それからは、県内で会社員として勤めながら、2010年には中国で貿易会社を設立し、日本、そして中国を忙しく往復する日々が始まりました。月のほとんどは出張で家を不在にし、とにかくがむしゃらに働き、家族を支えてきました。



### キウイ栽培をはじめようと思ったきっかけ

2010年に中国に会社を設立した際、故郷の四川省でキウイ農園の経営にも乗り出しました。これを言うと驚かれる方もいますが、キウイの原産地は中国です。日本のスーパーに並ぶ品種はニュージーランドのものがほとんどですが、本来キウイは耐寒性がある果物で、冬期の最低気温-10℃程度の地域でも栽培が可能です。実は中国や日本で栽培するのにとても適した果物なのです。

来日してから今まで、月のほとんどを中国との往復に費やしてきた私でしたが、コロナで渡航が相次いで中止になり、家族と過ごす時間が増えました。それ以前から家族との時間をもっと大切にしたいという思いがあったことから、中国での農園経営をきっぱりやめ、ここ富山県で地域に根差したキウイ栽培に挑戦することを決めました。

### 氷見市赤毛の土地との出会い

いざ栽培を始めようと意気込んだは良いものの、なかなか良い土地を見つけられずにいました。方々で土地探しをしていると、ご縁あって以前レタス農地として利用されていた赤毛の耕作放棄地を紹介してもらいました。面積は約5万平方メートル。土を入れ替え、スプリンクラーやイノシシ対策の柵を設置し、湧水を探し、自分で重機を操縦して池を造りました。冬には閉ざされてしまう農道をスノーモービルで通って整備を進めました。昨年苗を植えたばかりで収穫は4年後の予定ですが、苗も日々順調に成長しており、年間収穫は100～150トンほどになる見込みです。

このような整備にあたっては、大がかりな工事になりましたので、地域に暮らす住民の皆さんに少なからず影響があります。なので、まずは地域の理解をきちんと得ることが大切だと考えました。一軒一軒お宅をまわって、顔を見てお話し、理解いただけるまで説明をしました。今では、赤毛ですれ違う地域の皆さんが声をかけてくださったり、すれ違いにクラクションで挨拶をしてくださったり、本当に温かい関係を築かせていただいています。

農地を「赤毛キウイランド」と名付けたのも、いつか氷見市赤毛のブランドを生み出したいという思いがあったからでした。いずれは圃(ほ)場を広げて、景色の良さを生かした観光農園にしたり、四季のフルーツ狩りをしたり、地域の活性化につながれば、と思っています。

### 多文化共生社会実現のために、どんなことが大切か、ヒントをいただけますか？

やはり、人と人とのつながりが大切だと思います。ここ赤毛で顔の見える関係を築き上げてこられたのは、やはり住民の皆さんとのつながりがあってこそのことでした。お互いが助け合いながら協力し、地域を盛り上げていく、そんな温かい関係になればと思います。

## Breakfast Burrito (ブレイクファストブリトー)

私の出身地、アメリカのニューメキシコ州でよく食べられる朝ごはんです。1975年にサンタフェ市のカフェで誕生して以来、今ではアメリカ中に広まりました。ブリトーはもともとメキシコ料理ですが、中身はアメリカの朝ごはんの定番なところがユニークです。一日の始まりにぜひ作ってみてください。



～作り方～

### 具材を用意する

#### ベーコン・ハム

カリカリになるまで焼き、食べやすい大きさにカットしておく。

#### アメリカ風ハッシュポテト

1. ジャガイモを千切りにし、よく水けをきっておく。
2. ベーコンとハムを焼いたフライパンにサラダ油とオリーブ油を足し、1.のジャガイモを広げ両面がこんがりするまで焼く。ローズマリー、塩、胡椒などで味付けをする。

#### スクランブルエッグ

卵と牛乳でスクランブルエッグを作りシュレッドチーズをかける。

#### トルティーヤに包む

オーブンや電子レンジで2枚のトルティーヤを温め、用意した具を包む。お好みでトマトや豆、アボカド、チリパウダー・ソースなどを入れても美味しいですよ。たくさん作って冷凍しておくのもオススメです♪



～材料～

- ハムやベーコン …………… 150g
- ジャガイモ …………… 2～3個
- 卵 …………… 4個
- 牛乳 …………… 大さじ3
- シュレッドチーズ …… 0.5カップ
- トルティーヤ …………… 2枚
- サラダ油 …………… 適量
- オリーブ油 …………… 適量
- ローズマリー・塩胡椒 …………… お好みで

## 第26回とやま国際草の根交流賞

国際・協力活動を草の根レベルで実践している方々を表彰する“とやま国際草の根交流賞”。受賞者は以下の5個人、1団体の皆様です。

### 加治 秀夫 さん

富山県日韓親善協会において、長年にわたり役員として協会運営に携わり「全羅南道」等の韓日親善協会との姉妹交流事業に積極的に関与するとともに、仁川商工会議所（射水商工会議所と姉妹提携）との交流を活かし、当協会の国際交流活動の推進に多大な貢献をされました。

### 保科 克則 さん

劇団文芸座において、「富山国際アマチュア演劇祭」「とやま世界子ども演劇祭・舞台芸術祭」などの企画立案・運営等に携わるとともに、日本・ハンガリー外交150周年記念国際合同公演で中心的役割を果たすなど舞台芸術等における国際交流に尽力されました。

### 林 広麗 さん

来日後、長きにわたり富山県に在住し、日中間の経済・文化交流に携わるとともに、技能実習生監理団体の運営を通じた外国人への日本語学習支援のほか、県華僑華人会において日中交流イベントの開催、県内医療機関等へのマスクの寄付等社会奉仕活動に尽力されました。

### 橘 秀雄 さん

富山県南米協会において、2度（H22、H27）にわたる県南米親善訪問団の派遣や、南米協会設立40周年、海外移住家族会設立50周年記念事業の企画運営等にあたりるとともに、県内在住日系人に対し子どもの補習学習や不況時の生活困窮支援等に尽力されました。

### 宮田 妙子 さん

NGOダイバーシティとやま代表として、多文化共生研修会の開催等多文化共生・ダイバーシティの普及啓発に取り組むとともに、自治体国際化協会が認定する「多文化共生マネージャー」として外国につながる子どもたちの学習サポート等に尽力されました。

### 砺波市日中友好交流協会

砺波市姉妹友好都市である中国遼寧省盤錦市へ7回にわたり訪問団を派遣するとともに、砺波市在住中国人を招いての交流事業の実施や盤錦市からの訪問団、中国名古屋総領事受入れ、中国の災害時（四川大地震）における義援金募集等国際交流活動を推進されました。